

音楽表現の喜びを味わう子どもの姿をめざして

— 音楽科教育の扉を開く低学年の指導のあり方を探る —

若竹 広美¹

小学校の音楽科教育では、子どもたちが音楽活動の喜びを得るとともに、生涯にわたって音楽に親しむ上で必要となる基礎的な能力の素地を養いたい。本研究では、音楽科教育の扉を開く時期として大切な低学年の指導のあり方について、年間指導計画の作成及び授業による題材の検証を中心に取り組んだ。

はじめに

筆者は、小学校音楽科において「育てたい子どもの姿」を“主体的に音楽にかかわり、音楽表現の喜びを味わう子”と考えている。

このような子どもを育てるには、子どもたちが多様で幅広い音楽と出会い、音楽との様々なかかわりを通して、そのよさや美しさを感じ取って表現していくことができるような指導を行うことが必要である。

ところで、平成14年度から実施されている小学校学習指導要領では、音楽科の授業時間数が大幅に縮減されたが、低学年において授業時間数の改訂がなかったことには「小学校の音楽学習の基礎・基本をしっかりと身に付けることが必要とされる大切な入門期の学年」という指導の充実を求める意味がある。

低学年はまさに音楽科教育の扉を開くとも言える時期であり、この学年のより一層充実した指導のあり方を考えていくことは、小学校の音楽科教育にとって、また子どもたちが生涯にわたって音楽に親しんでいく上でも重要なことではないだろうか。

本研究では、その指導のあり方について、年間指導計画の作成と授業による検証を通して探っていくこととした。

研究の内容

1 研究テーマ設定の理由

(1) 子どもを取り巻く音楽環境と音楽科教育

子どもを取り巻く音楽環境は、情報社会の発達とともに大きく変化している。

子どもたちの周りには、様々な音楽があふれている。いつでもどこでも自分の好きな音楽を聴こうと思えば聴くことができる反面、聴こうとしなくても次から次へと音楽が流れてくる。子どもたちの中には、自らあ

る特定の音楽のみを選択し、それだけが音楽だと思いつ込んでしまっている場合がある。これではその他多くの多様で価値ある音楽の存在に気付かないまま過ぎてしまうことになる。また一方ではあふれる音楽を聴き流して、一つの音楽にじっくりと耳を傾けて聴く経験をもたず、それぞれの音楽のもつよさや美しさを感じ取ることができなくなっている場合もあると思われる。このような実態から、小学校の音楽科教育では子どもたちができるだけ多様で幅広い音楽に出会い、音楽との様々なかかわりを通して、そのよさや美しさを感じ取っていく体験をしてほしいと考える。

「多様で幅広い音楽」とは、学習指導要領に教材として示されている、子どもたちに「意図的に出会わせたいもの」である。また「音楽との様々なかかわり」とは、教材をどのように扱うかということであり、これは学習指導要領の内容に示されている様々な音楽活動を偏りなく扱うことである。

音楽科教育のよさは、授業において多様で幅広い音楽と、「あえて出会う機会」を与えられるところにある。それらの音楽と子どもたちとの「様々なかかわりをつくり出す」ことで、「自分一人では得られなかった音楽のよさや美しさ」を感じ取ることができると考える。

(2) 音楽科教育の現状

子どもを取り巻く音楽環境は、子どもにとって基本的に受け身の世界である。音楽を選択することはできるものの一方的に受け入れるだけで、自らつくり出し表出するといった体験は少ない。かつては、「子もりうた」や「わらべ歌」などの口伝で伝わる音楽があり、子どもたちの遊びの中にも「遊び歌」があった。そこには自分の歌を聴く相手や、ともに歌う仲間が存在し、音楽表現の楽しさに気付いたり、喜びを味わったりする場面が生まれていたはずである。しかし今日では、音楽表現する場は学校だけという子どもも少なくない。このような環境において、小学校の音楽科教育での表現活動は重要な学習である。

しかし現実には、音楽表現の楽しさに気付いたり、

1 平塚市立山下小学校
研修分野（音楽）

喜びを味わったりすることが十分ではない状況もある。例えば低学年は、音楽に対する反応が敏感で、友だちの歌を聴いて一緒に歌い出したり、音楽を聴いて踊り出したり、のびのびと音楽表現する姿が見られる。しかし、リズムや旋律を無視して怒鳴っていたり、周囲を意識せず自分勝手に動き回ったりしていることもあり、そのような活動は音楽表現の楽しさに気付いているとはいえない。また中・高学年と進むにつれて、だんだんと音楽表現そのものに消極的になる場合も多い。

そこで大切なのは指導のあり方である。子どもたちが音楽表現の楽しさや喜びを味わうような学習活動を充実していく工夫をしなければならない。そのために学習指導要領解説においても「多様な音楽を幅広く体験することが大切である」と示されている。

(3) 音楽科教育で育てたいもの

ア 子どもの姿

小学校の音楽科教育では「子どもたちが主体的に音楽にかかわり、音楽表現の喜びを味わう姿」をめざしたい。「主体的に音楽にかかわる」とは、音楽に対して興味・関心を持ち、音楽活動を積極的に進める中で自らが音楽の魅力に気付いていくことである。それぞれ学年ごとに高まり、深まっていく主体的な音楽とのかかわりを生み出していきたい。

「音楽表現の喜びを味わう」とは、主体的な音楽とのかかわりを通して、自分自身で音楽表現の楽しさや快さ、喜びの感情を味わうことである。

このような子どもたちを、多様で幅広い音楽との出会いと、音楽とのかかわりを通して育ていきたい。

イ 生涯音楽の素地

旧文部省音楽科解説書執筆委員で日本女子大学講師の川池は「小学校の音楽科指導で大切なことは、どの子どもにも生涯にわたって音楽を好み、一生を通じていつでも自分のそばに音楽があることを喜びとする心の芽をはぐくむことです。」(川池 2001)と述べている。また、平成10年の教育課程審議会答申による音楽科の目標及び内容の改訂においても「生涯にわたって音楽に親しむようにすること」が重視されている。

これらのことから小学校の音楽科教育は、子どもたちにとって生涯音楽の素地を養う役割を担っているといえる。その意味からも小学校では、各発達段階において子どもたちが主体的に音楽とのかかわり、音楽表現の喜びを味わう体験をたくさんさせていきたい。

ウ 音楽活動を通じた集団における学び

小学校の音楽科教育では、教科の目標に向けて個々の意欲や音楽性を高めると同時に、集団社会における協調性や自主性、社会性を音楽活動を通して培っていくことが大切である。

前文科省教科調査官の金本は、「新しい学力観に立つ音楽教育では、音楽科の学習活動は、子どもが自分

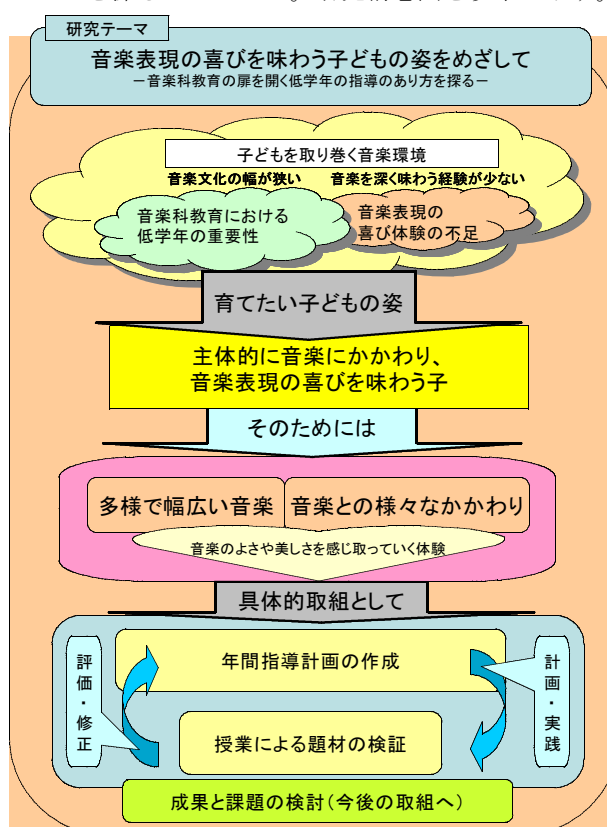
の考えだけで表現活動を進めるのではなく、友だちや教師と互いの表現を共に聴き合い、考え合い、認め合いながら学習を進めていくところに意義がある。」(金本 1997)と述べている。

音楽活動には、他の人とのかかわりがあり、音楽活動をする中で個と集団のかかわり方を身に付けていくという場面がある。仲間とともに一つの音楽をつくりあげたり、聴き合ったりすることで、お互いの連帯感や感動体験を共有することができる。このような体験を積み重ねる中で、音楽との新たな出会いや、音楽表現の喜びが生まれ、音楽活動に対する意欲をより高めたいこうとする「集団における学び」が生まれるのである。

(4) 音楽科教育における低学年の重要性

小学校低学年は音楽科教育の始まりの学年であり、「音楽科教育の扉が開く」とも大切な時期であると考えられる。音楽科教育において育てたいものは、すべてこの低学年が基盤となる。

小学校では、より指導効果を高めるため「音楽専科」を配置している場合もあるが、「音楽専科」が低学年を担当することは極めて少ない。低学年では授業時間数の縮減もなく指導の充実を求められながらも、ほとんどの学校では全教科を担当する学級担任が音楽の指導にあっている。この低学年においては、どのような音楽と、どのようなかかわりづくりをしたらよいのかを探ることとした。研究構想図を以下に示す。



第1図 研究構想図

2 年間指導計画の作成にあたって

(1) 学習指導要領の目標理解と内容把握

ア 「学習指導要領学年別比較表」の作成

年間指導計画作成に向けて、まず学習指導要領の検討を「多様で幅広い音楽」と「音楽との様々なかかわり」という視点で行った。各学年において目標、学習内容、教材がどのように表記され、どのような特徴があるのか、特に低学年に着目して学年別に比較し「学習指導要領学年別比較表」を作成(紙面上省略)した。

イ 学習指導要領学年別比較表から見て取れること

(ア) すべての学年の基本となる低学年の学習

比較表にはそれぞれの学年における目標や内容が記載されているが、これはその学年ではその目標や内容だけを扱うということではない。低学年の目標に加えて中・高学年の目標を加えて扱うという意味である。同様に内容についても、低学年の内容に積み重ねる形で中・高学年の内容が置かれているのであり、表記上も低学年の内容に付け足して示されている項目が多い。

このことから音楽科において低学年の学習は、すべての学年の基本となるものであり、低学年の重要性を再認識することとなった。

(イ) 楽しい音楽活動

目標における低学年の特徴である。低学年の子どもの発達段階を考慮して、常に音楽と一体となった楽しい音楽活動体験ををたくさん取り入れて、音楽表現の楽しさに気付かせることが大切である。

(ウ) リズムに重点を置いた指導

低学年の時期は「リズム」に対する感受性が敏感でその喜びを体全体で表現する。リズムに重点を置き、リズム遊び等を取り入れた楽しい音楽活動の工夫を心がけた学習が必要である。

(エ) 「聴唱」「聴奏」の重視

低学年の表現の内容には「互いの歌声や楽器の音、伴奏の響きを聴いて演奏する」という表記があり、これは他の学年では示されていない独特のものである。これはいわゆる「聴く力」の重要性を述べたものであり、表現活動をつくり出す源となる。

(オ) 他教科等との関連

低学年の子どもは、直接対象にかかわって豊かに表現しようとする傾向が見られる。指導の効果を高めるために、生活科など他の教科における学習内容や経験との関連も図るようにするとともに、学級や学校の生活との関連にも十分配慮して指導計画を作成することが大切であり、学習指導要領でも求められている。

ウ 表現領域における低学年の実態と指導の要点

実際に指導計画を作成する際、指導の要点となることを、研究テーマである表現領域について、学習指導要領の項目に沿う形で文献から調査し、「表現領域における低学年の実態と指導の要点」としてまとめた。

この「指導の要点」を「各題材における指導のポイント」として年間指導計画に盛り込むとともに、題材

の検証授業においては、この指導のポイントについて検証していくこととした。

(2) 「教科書内容検討結果一覧表」の作成

次に学校における具体的な学習指導の拠り所となっている教科書について、学習指導要領に示された低学年の学習内容が、教材ごとにどのように反映されているのかという視点で、全教科書会社の内容を学習指導要領と照らし合わせながら表現領域の内容検討を行い「教科書内容検討結果一覧表<表現領域>」を作成した。そこからは、次のような結果が見て取れた。

- 各社の教科書には、学習指導要領に示された学習内容が、年間を通して偏りなく取り入れられ「音楽との様々なかかわり」という点で、バランスよく構成されていることが確認できた。
- 各社を比較すると、指導内容が似通った題材でも扱う教材に違いが見られ、その点では「多様で幅広い音楽」が扱われているということも見えてきた。
- 各社とも年間を通して扱われる内容と、その題材に特有の指導内容があるが、年間を通して見たときの指導内容はほぼ同じという傾向が見て取れた。

従って「多様で幅広い音楽」と出会い、「音楽との様々なかかわり」を生み出す年間指導計画作成という視点においても、教科書をベースとすることに誤りはないことが裏付けられた。ただし留意すべき点は、各題材レベルでの指導内容が、題材ごとのつながりにおいて年間を通してバランスよく配置されることが大切であり、各教科書の中から題材や教材を都合よく切り取って配置してしまえば、指導の充実を図ることはできないということである。

(3) 年間指導計画例(第1学年、第2学年)

以上の検討結果から、低学年の音楽科年間指導計画例の作成を試みた。各題材ごとに指導のポイントを表記した点、及び教材については題材に即して選択できるよう、全教科書会社に掲載されているものを基本の教材群として配置した点が特徴である。

本例をもとにした年間指導計画が各学校において作成しやすいよう、各題材の学習内容については最小限のものにとどめた。また、本例の各題材における指導時数はかなり多く示されているので、各題材をいくつかの「小題材」に分けて設定することも考えられる。

3 題材による授業検証

年間指導計画例(第2学年)の題材「どんなようすかな」をもとに作成した小題材について、授業検証を行った。授業に際しては「各題材における指導のポイント」に着目し、それを具現化するための「手立て」を設定して、育てたい子どもの姿がどの場面でのように現れるのかを検証し、成果と課題にまとめた。

(1) 本小題材の指導のポイント

- | |
|--|
| I：伴奏や他の演奏に耳を傾け、リズムや音程、速度などに気を付けて繰り返し模唱させる。 |
| II：歌唱の旋律と伴奏の旋律が合っているかどうかよく聴きながら歌えるようにする。 |
| III：表現と鑑賞の関連を図りながら体全体で強弱や速度の変化を感じ取る活動をさせる。 |

(2) ポイントからの手立ての設定

ポイントIを例にとると、設定の一場面として愛唱歌を歌う場面に「手話や身体表現を取り入れる」という手立てを設定した。手立てのねらいは「楽しく音楽活動しながら、ポイントIの内容である“リズムや音程を正しく”歌わせる」である。このように本題材の3つのポイントを手立てに変換して、各授業に盛り込んだ計画を立てていった。

(3) ポイントに照らした主な成果と課題

ア ポイントIについて

愛唱歌の斉唱場面で手話や身体表現を取り入れたことで、曲の流れにのり、楽しそうに体を動かしながら良い表情で歌い、自然にリズムや音程をつかんでいた。

イ ポイントIIについて

主教材をけんばんハーモニカで吹く場面で、意欲的に曲の最初から旋律を吹いてみようとする子どもが現れ、演奏するときには自然に伴奏に合わせようとする態度が見られた。

ウ ポイントIIIについて

主教材の歌唱指導で、1年生の時にも扱った鑑賞曲を関連させて扱ったことで、楽曲を全体的に味わって聴くと同時に、自信をもって歌ったり身体表現したりする姿が見られた。

尚、他にも主教材の一部分に楽曲のイメージに合った音選びをしたとき、自分なりにふさわしいと思った楽器を選び、主体的に取り組む姿が見られるなどした。

しかしポイントIIについては、主教材を自動伴奏で歌う場面で間奏が途中に入っており、歌い出しのタイミングがつかめず、歌う意欲が薄れてしまうという課題も残った。

以上が育てたい子どもの姿に照らした検証授業の主な成果と課題である。

4 検証授業から見た音楽科教育で育てたいもの

(1) 題材配列を考慮した年間指導計画の大切さ

検証授業では、その題材目標に迫るために、指導計画例に示された、一つ前の題材とのつながりを大切に、音に関心をもたせ、音の出し方を工夫させることを意識しなければならなかった。このことから、題材同士のつながりを考慮して題材を配列することの重要性が確認できた。

(2) 低学年における楽しい音楽活動の重要性

検証授業では、音楽に合わせて身体表現やリズム遊

びをするなどの楽しい音楽活動を取り入れることで、子どもの中から「もっとやってみよう」という声が出たり、自分なりの音楽表現をしたりと音楽に主体的にかかわろうとする姿が見られた。低学年においてこのような楽しい音楽活動の体験をたくさん積むことが、中、高学年、そして生涯にわたって音楽に親しむための素地を養うことにつながっていくと考える。

(3) 集団における学びの再認識

主教材の歌唱では、友だちの姿を見て「自分もやってみよう」と手を挙げて、前に出てみんなの前で自信をもって歌う子どもや「一人では無理だけど二人ならできる」ということで、二人組で歌う子どもなどが次々に現れた。楽器を取り入れた合唱奏では、それぞれのパートを友だちと気持ちを合わせて演奏し、みんなの一つの音楽をつくりあげる喜びを味わう体験もできた。集団における学びのよさを再認識することができた。

おわりに

本研究では、小学校低学年の指導のあり方について「多様で幅広い音楽」「音楽との様々ななかかわり」をキーワードに探り、研究テーマに迫ってみた。

そしてその成果として低学年の指導のポイントを盛り込んだ年間指導計画例を作成し、検証授業から授業レベルにおいて指導のポイントをどう生かすかということについて成果と課題を導き出した。

音楽科教育の扉を開く大切な低学年において、全教科を指導しなければならない学級担任が、より充実した指導を展開していくためにも、この年間指導計画例と検証授業の成果と課題が少しでも参考になれば幸いである。子どもたちを取り巻く音楽環境の変化を見つめ、子どもたちがいつの時代にも音楽表現の喜びを味わうことができるような授業づくりを、今後も心がけていきたい。

引用文献

- 金本正武 1997『音楽科授業論』東洋館出版社 p.19
川池 總 2001『小学校新音楽科授業の基本用語辞典』明治図書 p.1

参考文献

- 文部省 1999『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社
金本正武・小原光一 2000『新しい教育課程と学習活動の実際 音楽』東洋館出版社
金本正武・川池 總 1999『新小学校教育課程講座 <音楽>』ぎょうせい
小原光一・山本文茂 1997『音楽教育論』教育芸術社